教 科 担 任 制 指 導 部 会 の 研 究

主　題

児童のよさを認め，学習意欲を喚起するための指導法の改善
―― ６学年における教科担任制を通して ――

Ⅰ　主題設定の理由

１　習熟度別指導との関連から

本校では算数科の指導形態として，１～２学年では少人数指導を，３学年以上では習熟度別指導を取り入れ，児童の学びの特質に応じたきめ細かな指導を通して，分かる喜びを味わわせる学習を進めてきた。その結果，平成１３年４月に実施したＣＲＴでは，全国平均を下回っていた３～６学年の算数の総合通過率が平成１５年２月には全国平均を上回るまでに向上した。

本校の３学年以上の児童は，学級の枠を外した習熟度別指導により，算数担当教師の指導を受ける経験を積んでいることから，教科担任制導入に際して障壁となるであろう学級担任以外の教師の指導を，抵抗なく受け入れる素地はできていると考えられる。

２　児童の発達段階との関連から

６学年の児童は，社会全体の価値観の多様化に伴い，興味・関心が様々に広がるとともに，発達的に心と体のバランスがとりにくい不安定な時期を迎えている。児童が，自分のよさや能力など様々な可能性に気づき自信をつけていくためには，同級生や親，そして教師からも認められる経験が不可欠である。

算数以外の教科においても，多くの教師が児童と関わり，複数の目と心で一人一人のよさを様々な角度からとらえ認めて支援していく教科担任制の導入は,児童の発達を促すうえでも有効である。

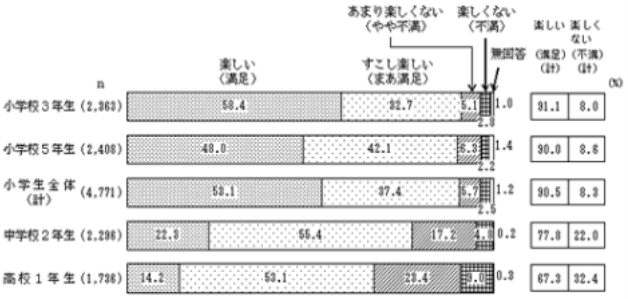
６学年の児童は中学校進学に際して，学習面では教科担任制に対して強い不安を抱いている。中学校入学を控えた６学年で教科担任制を経験することは，このような児童の不安を軽減するためにも有効であると考えられる。

３　学習意欲向上のために

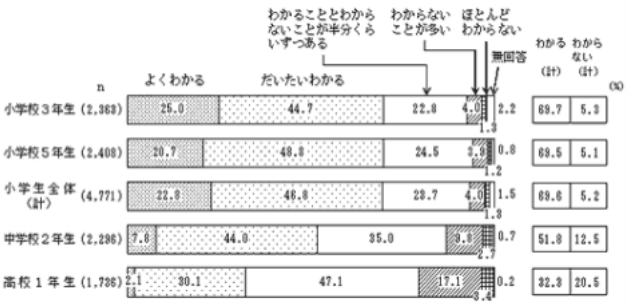
文部科学省が平成１５年度に実施した「学校教育に関する意識調査」によると，学年が進むにつれて「学校生活への満足度」（図１）と「授業の理解度」（図２）が低下することが分かった。

児童は，いろいろな経験をもとに考えたり，学習し理解した内容について「さらに詳しく知りたい」「深く調べてみたい」という欲求をもっている。

図－１　学校生活への満足感



図－２　学校の授業の理解度



【 学校教育に関する意識調査（文部科学省　平成１５年度実施）より 】

物事を論理的・抽象的に思考する力が著しく伸び知的欲求が高まる６学年のこの時期に，教科担任制の導入により，教師の得意分野を生かした分かる授業づくりを通して，一人一人の児童のよさを大切にしつつ，基礎的・基本的事項を確実に理解させ，学習意欲を一層高めていきたいと考える。

以上の理由から，本校では６学年において児童のよさを認め学習意欲を喚起するための指導法の改善をめざし，教科担任制を導入した。

Ⅱ　教科担任制導入の基本的な考え方と手だて

１　児童一人一人を多面的にとらえ，よさや可能性を引き出す。

○多くの教師が児童を指導していくことにより一人の担任では気づかない面を発見できるように，情報交換を密にする。
○年齢や性別の違う複数の教師とふれ合う機会を増やすことにより，いろいろな考え方や感じ方があることに気づかせる。
○常に学年担任としての意識をもちながら学年全体の児童の指導にあたる。

２　教師の得意分野を生かした授業を行い，児童の学習意欲を喚起し持続させる。

○児童が適度な緊張感を保ちながら学習に臨み，知的好奇心を高めながら学ぶ楽しさや分かる喜びを味わえるようにするために，教科ごとに担当者が替わることのメリットを生かした授業を進める。
○魅力ある授業を提供するために，担当する教科の教材研究や教材準備の時間を確保する。
○授業時数を確保することにより，各教科の学習内容の定着を図る。

３　教師の指導力のスキルアップを図る。

○各学級の児童の特徴をつかみながら，その実態に合わせた指導を工夫することで，教師の指導力を向上させる。
○同じ単元を複数回指導することにより，指導を振り返り，教材研究の深化と指導力の向上を図る。

４　中学校へのスムーズな移行を図る。

○中学校での教科担任制へスムーズに移行させるために，学級担任制のよさを生かしながら学級担任以外の複数教師の指導に慣れさせる。

教科担任部会　研究の成果と課題（１７年度）

１　児童一人一人を多面的にとらえ，よさや可能性を引き出すことに関して

教科担任制の実施に際して，学級担任が教科指導において当該学級を担当する時数が減少することから，当初は学級担任と児童との結びつきが希薄になるのではないか，という懸念があった。

学級担任と子どもたちとの結びつきの強さは，単に接する時数の多寡によるものではなく，児童理解の深さによってもたらされると考えられる。常に学年担任という意識をもちながら児童の指導にあたり，複数の目と心で，多面的な視点から児童をとらえるために，児童理解のための情報交換を密にしてきた。その結果，教師には「学年の児童」，そして児童には「学年の先生」という意識が定着し，教科担任の指導者を含めて，学年全体の教科指導を円滑に行うことができた。

児童にとって，学級担任が気づいていないよい面を複数の教師に見つけてもらうことは，児童自身の可能性の発見につながり自信をもたせるきっかけになる。また，学級担任にとっては，他の教師からの指摘が，児童理解を深めることにもつながる。

児童にとって安心して学習できる環境を保証し，好ましい学習習慣を身につけさせるためにも，そして，児童のよさを多面的にとらえ指導するためにも，今後さらに児童理解の観点を精査し，担当者間の情報交換を密にする必要がある。

２　教師の得意分野を生かした授業を行い，児童の学習意欲を喚起し持続させることに関して

学年の進行と共に授業の理解度が低下し，学校生活への満足感を得にくくなっている児童の増加傾向が問題になっている。学習を通して新しい知識を獲得し，「分かった，できた」という喜びがあって初めて「関心・意欲」が生まれ，強化される。基礎的・基本的な知識の習得・定着のないところに学習意欲は生じない。

教科担任制により，教師にとっては得意分野の教科に絞って教材研究ができるため，教材研究や準備の時間に余裕が生まれた結果，従来にも増して児童の知的欲求に応える指導がしやすくなり，児童の学習意欲の向上につながることが期待できる。

これまでの実践を通して，教科担任制では教科ごとに担当者が替わることにより，児童は気持ちを切り替えて適度な緊張感を保ちながら学習していることが分かった。

また，教科担任制導入後，６学年児童を対象に行った「意識調査」の結果，「楽しみな授業が増えた」「好きな教科ができた」という回答から，教科担任制により学習意欲が向上する効果が現れてきていると考えられる。

しかし，進んで学習したり，積極的に発表したりすることに関しては未だに満足できる状況になく，今後改善していきたいと考える

３　教師の指導力のスキルアップに関して

教科担任制の中学校教師と異なり，学級担任制の小学校教師は一つの単元を複数の学級で複数回指導することを経験するのは希である。十分な教材研究の結果授業に臨んでも，授業後に幾多の反省が生じるのは誰しも経験することである。

本校における教科担任制の主な効果として，以下の点が挙げられる。

・一つの単元で同じ内容を繰り返し指導できることから教材研究が深まり，児童の反応に臨機応変に対応できる柔軟性や指導力を身につけられる。
・学級ごとの理解度や学習に対する姿勢の違いがより鮮明になることから，学級の実態に合わせた指導を工夫しながら評価規準を意識した指導をすることができる。
・他の学級の児童にも親近感を感じ，より広い視野で指導することができるようになる。

今後，教科担任制ならではのよさを生かし，児童の指導に還元できる評価のあり方についても教師のスキルアップを図ってきたいと考える。

４　中学校へのスムーズな移行に関して

中学校進学に際して，６学年の多くの児童は教科担任による複数の教師の指導に対応できるか不安を抱いている。本校の教科担任制は，副次的に中学校入学後に適応を容易にする効果もねらいの一つとしているが，中学１年生に対する追跡調査の結果を見ると，小学校で教科担任制の授業の経験がある生徒の方が未経験の生徒よりも中学校の教科担任制に適応しやすいことが分かった。

このことから，中学校における授業の難しさ等，入学当初中学校生活に少なからず不安を抱えている生徒にとって，小学校時代に担任以外の教師と数多くふれ合う教科担任による学習を経験することは，不安を軽減させ，中学校生活にスムーズに移行させるうえで有効であることが分かった。

６学年保護者の意識調査からもわかるように，児童の学習意欲の向上は，教師だけではなく保護者の願いでもある。その共通の願いを実現して中学校に送り出せるように，今後も教科担任制の利点を生かしながら研究主題に近づくための実践を続けていきたい。